古代エジプトのセト神

——第19王朝を軸にして——

小　野　真理子

はじめに

古代エジプトの長い歴史の中では，数多くの神々が崇拝されている。その中でも，セト神ほど興味深い神はいない。なぜならば，セト神は神話の中で悪の要素をもつ神として描かれるとともに，ある時期には王名の構成要素として現れるなど善の面をも持っているからである。この神は，エジプトの王朝が始まる以前からその存在が確認され，その後も末期時代まで主要な役割をはたすなどエジプト史の全ての時代に現れるが，その扱われ方は実に多様であった。

セト神の表記法も一様ではなかった。セト神は，セテシュ *śtš*[1] という形でウナス王のピラミッド・テキストの中で描かれる(1)。また同じテキストのなかにおいても，語頭の s には *ś* と *s* など2種類の表記がなされる[2]。そのどちらで書かれていても，*t* はそのままの姿で使われる[3]。

また，その伝統的な書き方とともに，中王国時代以降には，スウティ *s*(*w*)*t*(*y*)[4] があらわれ，ヒクソスの時代からはスウテク *s*(*w*)*tẖ*[5] というものもある(2)。第19王朝以降や下エジプトではそのスウテク *swtẖ* という形が主流となった(3)。

セトはその名の一部を構成するテシュ *tš*[6] が「破滅させる」や「壊す」という意味をもつことから，「混乱の扇動者」という意味合いをもつとされる(4)。くわえてテシ *tši*[7] が「砂漠へ行く」を意味することから，「砂漠」や「辺境」と関連付けられた。またテク *tẖ*[8] が「(酒に) 酔う」や「酔っ払い」の意味を持つことから，「ビールの神」もしくは「酒の神」という意味があり(5)，ワインの女神とされているハトホル女神とともに描かれたセト神の石碑も見つかっている(6)。

そして，それらの文字のうしろには，通常「セトの動物」(Seth-animal) とよばれる正体不明の動物が決定詞としてつけられる。その用法には，腹ばいになった形や座っている形，頭が「セトの動物」で身体が神の形となるものがある[9]。なかでも全身が動物の姿で描かれる場合は，上にまっすぐに伸び，先端が角張った両耳と，直立して先端が二又になった尾をしたイヌ科の動物の形

で表現された。また，ブタやロバなどの動物の姿をとる場合もあった。セト神が動物として現れる時の姿は，何から由来するのか不明ではあるが，その姿から砂漠にいる動物であるとされており，ここから，セトの性格は開墾されていない土地の力や荒々しさを体現していると考えることができる。

そして，セト神の形容辞としては「ヌトの息子 *s3 Nwt*」，「力強きもの *pḥty*」，「ヌベト（ギリシア名オンボス）の主 *Nbt nb*」[7]などがあり[10]，主として，戦いの場面で敵を打ち倒したりする時に好んで使われる。セト神はまた外国の神とも結びつくこともある。

以上のように多様にあらわれるセト神に関する研究として，P. E. Newberry[8]や A. S. Jensen らを中心とした「セトの動物」の起源に関する研究[9]と，E. J. Baumgartel や J. G. Griffiths らのセト神の起源を探る研究，K. Sethe や H. Kees, A. H. Gardiner らのオシリス神話の中にある「ホルスとセトの争い」の歴史的な背景やその起源に関する研究がある。またセト神の全体像を捉えたものとして，H. te Velde の著書が挙げられる。この著書は，上記に挙げた研究を詳細にまとめ，個々の論拠となるものの出典を明らかにした標準作品といえるものである。本稿であげる第一次史料はこの著書に書かれたものと J. H. Breasted の著書からあげている。また，以下にあげる研究史もヴェルデの著書に拠っている[10]。

「セトの動物」の研究で，ニューベリーは関連した文学やシャンポリオンやロセリーニ Rosellini，レプシウス Lepsius といった文献のリストとともに，いくつかの仮説を提示し，オリックスやオカピ，アリクイなどの動物をあげている。ジェンセンはこれに追随せず，キリンの形を求めた。

セト神の起源を求める研究においては，バウムガーテルはナカダⅠ文化（前4000年から前3600年）の頃にはセト神の崇拝が始まっているものと考え，エル=マハースナの墳墓で見つかった象牙製の手工品，おそらく櫛であるものがセト神を表した最古のものであるととらえている。しかし，ナカダⅡ文化（前3600年から前3100年）で同様のものが見つかっていないことの説明がなされていない。これに対し，グリフィスはただ耳と尻尾があがっているだけで，「セトの動物」との類似は少ないと考えている。また，ナカダⅠ文化にはすでに隼の姿が現れていることに注目している。

「ホルスとセトの争い」などの宗教的なテキストからの研究では，ゼーテはエジプトの長い歴史時代で描かれたものを，先史時代の政治的な状況に反映させようとしている。しかし，宗教的な現象に対し，政治的原因を求めすぎている傾向があるという意見もある。ケースは，ホルス神とセト神が対をなす一組の神々と考え，その一対としての機能は，エジプトの持つ二元性の概念を意図したものであり，そのうえでこの神話は歴史的に見るのではなく，自然神話と

して，時を越えた経験をふくむものと考えている。ガーディナーは，大筋においてゼーテの立場にたっている[11]。前述したバウムガーテルは，ケースの理論に従い，ホルス神を崇拝するナカダⅡ文化の人々によって，セト神の町であるヌベトの征服がなされ，「ホルスとセトの争い」はここに起源をもつものとしている。

これらの論をふまえ，W. Pleyte の論をうけて，W. B. Emery が次のような仮説を呈している。それは「オンボス周辺に住んでいたエジプトの先住民たちは，セト神を彼らの主要な神として崇拝している。そののちホルス神を崇拝する王朝を築いた人々が，先住民たちを従属させた。その二つの種族とかれらの宗教の統合が，その結果である。・・・しかし，セト神は同化せず，エジプトの歴史のいたるところに残った。その後，セト神は悪の性格とみなされ，古典的な時代にテュポンと同一視された」というものである。テュポンというのはギリシアの神であるが，セト神はプルタルコスによって彼の著書のなかで常にテュポンとして書かれている[12]。

以上，ヴェルデに拠って研究史をまとめてみたが，これらの研究はホルス神を中心として考えており，また先史時代の考古学的な実証が少ないことから，推測の域を出ていない。

また日本におけるセト神の研究は，かなり遅れているといえる。あげられる論文としては，大島一穂「ホルス神とセト神の争いの神話と『二つの国の統一』」[13]と岡山光憲「古代エジプトにおけるセト神とその信仰について」[14]のみである。前者は，その論文名からもわかる通り，セト神の研究というよりは，エジプトの先史時代と上下エジプトの統一の時代におけるホルス神とセト神の現れ方をとらえようとしたものである。また後者は，歴史の中に現れたセト神の概要とセト神と関連付けられたと考えられているオクシリンクスという魚をとりあげたものである。このように，日本においては，セト神の信仰そのものに焦点を当てた研究はなされていない。

本稿ではエジプトが上下の王国を統一し，国内の政治に専念していた古王国時代や中王国時代，その後の国外に勢力をのばした新王国時代，そしてその後のアッシリアやペルシアなどの外国人の支配を受けた末期王朝の時代という時間軸で捉えることによって，このような多様な研究史も，ひとつにまとめられる可能性があることを示す。セト神が王名に現れた第 19 王朝を中心に，セト神に対する信仰がどのようなものであったのかを明らかにしたい。

エジプトの歴史の中で，神の名を自らの名にとりいれた王は数多くいる。第 19 王朝までに，34 名の王が何らかの神の名を使った。そのうち，13 名がラー神の名を使い，9 名がアメン神の名を使っている。その中で，セト神の名を使った王は 1 人もいない。

セト神の名は，第19王朝になって初めて使われる。次の第20王朝初代の王もセト神の名を王名として使っている。また，王名として使われたために，他の時代よりもセト神に対する図像が多く存在する。セト神は古い由来をもち，エジプトの歴史の中でオシリス神話などに登場するなど主要な役割を担っていたが，後の時代にはトト神やゲブ神に置き換えられ，当時の信仰の形態がよく分からなくなっている。この第19王朝の時代を調べることで，セト神が実際にはどのように扱われていたのかを推察することができるであろう。

以下，第一章ではエジプトが国内を統一し，国内の政治に専念した時代と，新王国時代になり国外に勢力を広げようとしていた時代に現れたセト神を概観し，その中でどのような性格づけがなされていたのかをとらえる。次に第二章で，特に王名としてセト神が使われた第19王朝をとりあげてその時代に，セト神がどのように扱われたのかを推定する。第三章では，第19王朝以降のセト信仰を取り上げ，エジプト人にとってセト神がいかなるものに変化したのかを論じて，結論につなげるものとする。

第1章　歴史の中で現れたセト信仰

本章では歴史の中で現れたセト信仰を，順をおって見ていくことによって，第19王朝までにセト神にどのような性格が付与され，また王とどのような関係にあったのかを明確にする。セト神が王名に使われるに至るまでに，王家とどのような関係にあり，どのような捉え方をされていたのかをみることによって，神話の中で現されたセト神以外の扱われ方を見ることができるであろう。

セト神の出身地はヌベトであるとされており，そこは上エジプト第五ノモスの町で，現在のナカダとバラースの間に位置している。先王朝時代の墓地群があり，1895年にF. Petrieと J. E. Quibell[15]によって発見された。その発掘の中には，土器やフロント製の石器，象牙の櫛などがある。これらの遺物が前4000年から3100年のナカダⅠ文化とナカダⅡ文化の年代の基準となっている。

「セトの動物」に似た特徴をもつ考古学的な発掘を，すべてセト神の崇拝と繋がるものであると仮定すると，エジプトの中で最古のものは，ナカダⅠ文化のエル=マハースナの墳墓で見つかった櫛と思われる手工品[16]である。またヒエラコンポリス（古代名ネケン）で見つかった先王朝時代のサソリ王の棍棒頭にも「セトの動物」らしき姿が描かれている。ヒエラコンポリスは，ルクソールの南80キロメートルに位置しており，クイベルと F. W. Greenによって発掘された。この町は，先王朝時代と初期王朝時代に繁栄し，サソリ王の棍棒頭とともにナルメル王の化粧板も見つかっている。サソリ王やナルメル王はエジプトの統一の時代に生きた王であり，その図柄にも現れているとおり，隼の神

であるホルスを崇拝していた。

かれらホルスを崇拝する人々によってエジプトの統一はなされ，王は自らのホルス神の化身としての属性をあらわすホルス名をもっていた。その名はセレクと呼ばれる長方形の枠で囲われており，その上にホルスが描かれている。この他にも，王がホルス神の化身としてエジプトを支配するなかで，セト神もまた力をつけていたようである。

それは，第2王朝によく現れている。アビュドスのウンム・アル=カアブの墳墓Pから発見された壺の封印には，セケムイブとペルイブセン[17]という二つの名がきざまれていた。またこの墓にたてられた石碑の中にも同じ名があらわれている。このなかでセケムイブの名を囲むセレクにはホルスがのり，ペルイブセンのセレクには「セトの動物」がのっている。この二つの名は，一般的に1人の王をさすものと考えられている。セケムイブという王名は，この王の治世前半のホルス崇拝が優勢であったころのものであり，ペルイブセンはこれに対してセト崇拝が優勢になった結果であると考えられている。またこのときアシュという名の神が描かれているが，この神の頭は「セトの動物」の頭である。このことから，ペルイブセンの頃にはリビアの神アシュがセト神と同一視された，もしくは外国の神をセト神としてみなす考え方をするようになっていたと考えられる[18]。

ペルイブセン王の後，カセケムイという第2王朝末期の王の治世において，ホルス=セト名[19]が使われた。彼の名は通常，セレクのうえにホルスとセトの両方をのせている。これは，王がホルス神の化身であり，かつセト神の化身であるということを示している。つまり，セト神はこのときには「ヌベトの主」とともに「(上) エジプトの主」[20]であったのである。

その後の王たちは，セト名やホルス=セト名を使うことなく，ホルス名にもどっており，セト神の優勢が一時的なものであったことを示している。このときのホルス神とセト神の現れ方が，後のオシリス神話や「ホルスとセトの争い」に影響を与え，「オシリスの殺害者」「ホルスの敵対者」としてセト神が扱われたことの原因となったであろうし，多くの研究者がこの点に注目している。

古王国時代に入り，第3王朝の王達はその王国の中心をメンフィスへと移し，メンフィスの西の地平線上にあるサッカラにその墓所を移した。そこではベンチの形をしたマスタバとよばれる墓を積み上げた最古の「階段」ピラミッドが建設され，その周りに葬祭殿などが配置された。

その後ピラミッドはヘリオポリスの太陽神の神殿にあるベンベンとよばれるオベリスクにみたてられ，階段状から「屈折」ピラミッド，「真正」ピラミッドとなり，ギザの三大ピラミッドのような巨大な建造物となった。第4王朝か

らは，太陽神ラーの信仰が勢力をまし，王名のなかでラーの名がよく使われている。第4王朝から第5王朝まで，16人の王が即位し，そのうち10人がラーの名を使っていた[21]。

第5王朝最期の王ウナスのピラミッドに，現存する最古のピラミッド・テキストが残されている。これは，アトゥムを主神とする太陽神崇拝を象徴したヘリオポリスの神学が組み込まれており，セト神はアトゥムを始まりとするヘリオポリス九柱神の一柱である。その中でセト神はオシリス神の弟[22]であり，「オシリス神の殺害者」（第218章第163節）[23]であり，「王の敵」（第218章第173節，第356章第578節）[24]であるが，一方「オンボス（古代名ヌベト）の主」（第268章第370節）[25]として，上エジプトを代表する神として現れている。

また，第3王朝以降メンフィスが王国の中心となり，メンフィスの主神プタハの地位が高められ，そこに「メンフィス神学」の体系が成立した。その中でホルス神とセト神はゲブ神の法廷において，エジプトの王位を争っている。ここでゲブ神はセト神を「上エジプトの王」（8行目，10行目）[26]とし，ホルス神を「下エジプトの王」（9行目，11行目）とした。その後，ホルス神がゲブ神の長子の子，つまりオシリス神の息子であるがゆえに，上下エジプトをホルス神のものとし，ホルス神が「上下エジプトの主」（10行目）としてエジプトは統一したとしている。

これらのことから，セト神は第5王朝に残された神話の中において，「オシリスの殺害者」「王の敵」「ホルスの敵対者」，そして「上エジプトの主」としての認識がなされていることがわかる。また一つの図像からの推察ではあるが，第2王朝には外国の神をセト神として認識し始めていたようである[27]。くわえて，ウナス王のピラミッド・テキストにあらわれたセト神は，下エジプトにおけるセト信仰に関する最古の文献であるかも知れない。この期間の前後からセト神は上エジプトだけでなく，下エジプトにまで勢力がひろがった，もしくはセト神の名が広がったと考えることができよう。

第一中間期とよばれる第6王朝から第10王朝についてはほとんどわかっていない。しかしヌベトで第9王朝にセト神殿が建てられたことがわかっている[28]。神殿の上部分は後世に建て直されており，第9王朝に建設された部分は一部しか見つかっていない。この他にも陶器の破片がみつかっており，神殿の周辺に人々が集っていたことがわかっている。

中王国時代にはいり，第12王朝でもセト信仰が上エジプトにあったことがわかっている。上エジプトでは第9王朝に続き，ヌベトでセト神殿の建設がなされており[29]，第9王朝で建設した部分の上部とその西側の壁を作っている。またこの周辺では，アメシストや金で覆われたスカラベも見つかってい

る。くわえて「セムタウイ」とよばれる，ホルスとセトが統一をあらわす南北の植物を結びつける動作をした図もあり[30]，この中で刻まれた王の名は，第12王朝第二代のセンウセレト一世である。これにより，この時代には神話の中だけでなく，実際に図像の中でも，セト神はホルス神と同様にエジプトを代表する神であり，とくに上エジプトを象徴する神として考えられていたことがわかる。他にも第12王朝の祖アメンエムハト一世の時代に書かれたとされている「ネフェルティの予言」とよばれる作品の中でも，上エジプトを代表する神として描かれている[31]。

中王国時代の後，第二中間期にかけて，ヒクソスとよばれるパレスチナ地方の人々がエジプトに移住し，下エジプトのデルタ地帯で王権を確立するに至った。ヒクソスはヘカウカウスト *hḳ3(w)−ḫ3s(w)t*[32][11] と書かれ，「諸外国の首長たち」という意味をもっている。現在では第二中間期に入り王朝をたてた集団を指す言葉として使われているが，本来はシリアやパレスチナの王達を指す称号であった[33]。

彼らはアヴァリス（テル・エル=ダバア）に都を置き，そこから西に勢力を広げ，下エジプトのデルタ地帯を勢力下においた。ヒクソスについては彼ら自身が文字を残さず，支配地域をはじめ行政組織，文化等について不明な点が多い。しかしおおむねエジプトの図像表現と伝統を受け入れていたと考えられている。都であるアヴァリスは，M. Bietak によって1966年から発掘が進められ，第一中間期から第二中間期にかけてのいくつかの居住跡や，ラムセス時代（第19王朝）の居住跡の遺跡が発見された。

そのなかで，第13王朝の王宮跡から，北シリアの天候の神であり，船乗りの神であるバアル神の姿をあらわした円筒印章が発見されている。このバアル神は後にセト神と同一視される。このことは，北シリアの地方神が，第13王朝時代までにアヴァリスに来ていたことを意味するとともに，この地がセト神の崇拝の中心地となったことに対する契機であったとも考えられる[34]。

なぜ天候の神バアルとセト神が同一視されうるのか。それは「ホルスとセトの争いの神話」の中で，セト神は，太陽神ラー・ホルアクティの息子であることから，雷の神となり，天候と関わりがあったからである[35]。

第14王朝に入ると，初期の王と考えられているネヘシ *Nḥśy* の名前が発見されており，その王の修辞の一つに「アヴァリス（古代名フト・ウアレト）の主，セト神に愛されし者」というものが現れる。これは，この時期にシリアの神に変わって，エジプトのセト神がアヴァリスの神になったことを示している[36]。また，タニスで発見されたネヘシのオベリスクには「ネヘシ，*r−3ḥt* の主セト神に愛されし者 *mry Nhśy St nb r−3ḥt*」と書かれている[12][37]。

ここからタニスやアヴァリスでは第14王朝にはセト信仰が始まっており，

バアル神との同一視がなされていたということが出来る。しかし，ここで一つ問題が生じる。第2王朝のペルイブセンのころに，リビアの神アシュがセト神と同一視されていることや，「セト神の信仰の中心地であるヌベトが『黄金の町』を意味しているように，ワディ・ハンママートの金鉱との関係や，カルガ・オアシスへのキャラバンルートの出発点であることから，セト神は砂漠で働く人々の神であり，外国と関係する神であった」(H. Kees)[38]というように，セト神は上エジプトを象徴する神であると同時に，外国や砂漠といった，エジプトではない場所に関係のある神でもあった。エジプト人のなかにセト神が外国の神であるという考えがあったために，バアル神をセト神と置き換えたとすると，実際にネヘシをはじめヒクソスの王達がセト神を崇拝していたのかどうかは，判断できない。ヒクソス時代の遺物はエジプト人によってつくられているからである[39]。いずれにせよ，この時代にヒクソスによって下エジプトにバアル神が紹介され，またそれがセト神として残されているということはできるであろう。

ヒクソス王朝の衰微を機会として，テーベの周辺の勢力を結集した第17王朝のアハメス王やカーメス王らによってエジプトが統一され，その後新王国時代となる第18王朝が登場する。

第18王朝になるとヌベトにあるセト神殿は大規模に増築され[40]，セト神の図像が多くなった。アメンホテプ一世の頃に，アメン神官であるネジェム *Nḏm* という人によって石碑が作られている[41]。そこでは，セト神が上下エジプトをあらわす二重冠をつけており，その修辞には，「ヌベトの主」「ヌゥトの息子」「力強き者」とともに「力強き前足（もしくは腕）*wsr ḫpš*」[13] というものが現れる。また第3代トトメス一世の石碑ではセト神は上エジプトを象徴する神であるとともに，下エジプトを象徴する神として描かれている[42]。他にも第5代トトメス三世の頃のものとして，いくつかの壺が見つかっており，そこにはトトメス三世の名前と「ヌベトのセト神に愛されし者 *mr St*[43] *Nwbt*」と書かれているものがある[14][44]。くわえて，第18王朝の初期に一つの墓が作られたが，その墓はセト神の主要な神官であるバク *Bꜣk* によるものである。

以上のことから，まずセト神の崇拝が現れたのは先王朝時代からであり，第2王朝には一時的にではあるが王家の主要な神となった。また外国の神との同一視もこの頃から見ることができる。古王国時代には，ピラミッド・テキストの中で「オシリスの殺害者」「ホルスの敵対者」そして「上エジプトの主」という位置付けがなされた。第一中間期には，上エジプトのセト信仰の主要な都市であるヌベトに神殿が建てられ，中王国時代にはその神殿が増築されるとともに，図像の中でもセト神は上エジプトを象徴するものとされた。第二中間期にはいり，下エジプトにヒクソスの神であるバアルが紹介され，セト神と同一

視され，またヒクソスはセト神とみられる神を国家の主要な神として崇拝している。新王国時代にはいり，セト神は上エジプトの神であるとともに下エジプトを象徴する神としても描かれるようになった。

ここで，セト神は古くから「上エジプトの主」として崇拝され，主として第二中間期に外国と関係する神となり，下エジプトをも象徴する神となったことがわかる。また「オシリスの殺害者」としてあるセト神は，他の神を倒すほどの「力強き者」であり，新王国時代に書かれる「死者の書」や「下界の書」のなかでは，セト神はラーの舟の先端に立ち，混沌を象徴するアポピス蛇を倒す役割を担っている[45]。このように，セト神は「殺害者」として迫害される神というよりは，ホルス神とともに描かれ，上下エジプトもしくはエジプトと外国を象徴する神であり，また「力強さ」をあらわす神として言及されているということができる。このことは，次にあげる第19王朝にセト神が王名として使われたことや，この王朝になりセト神が図像として頻繁に描かれていることへの理由を知る手助けとなるであろう。

第2章　第19王朝におけるセト信仰

本章では，セト神が王名として使われた第19王朝の中でのセト信仰をみていく。セト神の名はこの時代に他の時代よりも多く記述されており，図像もまた多く残っている。この時代を見ることによって，他の時代のような少ない史料から推察するよりもくわしい実像をみることができるであろう。

第19王朝の初代の王はラムセス一世である。彼はホルエムヘブ王の宰相であり，王の信任があつく，嫡子のいなかったホルエムヘブ王が位を譲ったといわれている。王族ではなく軍の高官であり，セティという名の司令官の息子であった。彼の父の名と息子であるセティ一世の名前から，ラムセス一世の祖先はアヴァリス出身であったと考えられている。また，セティ一世の息子であるラムセス二世がアヴァリスにペル・ラムセスと呼ばれる大きな都市を建設していることからも，そのように考えられている。

ラムセス一世の治世はおそらく二年ほどであり，残された遺物はとても少ない。ワディ・ハルファのホルス神殿で彼の治世第2年に作られた石碑が発見されているが，このなかではセト神に対する記述は見つかっていない。

その次に王となったのが，セト神を王名として使ったセティ一世である。彼はまた，父と同様に宰相と軍の指揮官という任務を兼ねていた。エジプトの国力を回復するために海外への進出を企て，治世初年からシリアに遠征をはじめている。彼の主要な建築としてカルナックにあるアメン神殿の大列柱室とアビュドスにあるセティ一世の葬祭殿，そしてオシレイオンとよばれる建物が挙げ

られる。その中でもアメン神殿の大列柱室の北および東の外壁に記されたシリアへの遠征の記録は注目に値するものである。

セト神はこの王の下でそれまで以上に崇拝を受けることになった。このシリア遠征には，軍隊の名前としてアメン神やラー神とならんでセト神の名前が使われている(46)。この中でセト神は「力強さ」を表す際に使われていることが多い。これは，前章でもふれたように第18王朝でもなされていたことである。また，「セトの動物」はバアル神の名前でバアル *Bcr* のように決定詞として使われていたり，そのままセト *St* として使われている[15]。

しかし，「力強さ」を表すのはセト神だけではない。第11王朝の主要な神あったモンチュウ（モント）神 *Mnṯw* もまた「力強さ」をあらわす神として描かれる。モンチュウ神は基本的には隼の頭をもち，人の体をした戦いの神として描かれるが，「戦いの神」という共通点からしばしばセト神の決定詞が使われる[16]。とくにオシリスの聖地アビュドスでは，セト神の名前はモンチュウ神に置き換えられている(47)。

ここからは，「セトの動物」で表されるセト神やバアル神とセト神，さらに同じく「力強さ」の神であるモンチュウ神がどのように記述されたのか，具体例をあげて見ていくものとする。

セティ一世のまとまった記述として，カルナックのアメン神殿の外壁に掘られたレリーフがある。その中に神々への奉納碑があり，そこではセト神や他の神に対して下エジプトの冠を戴いた王が香を捧げている(48)。

「セト神，すばらしく，力強きものに言われること *ḏd mdw jn St cꜣpḥty*」[17]

また，ホルス神とともにセト神がセティ一世に聖水をかけて祝福している図もある(49)。

「ヌベト，大地の主に言われること *ḏd mdw in Nbt nb-tꜣ*」[18]

そのほかにも，シリアへの遠征の記述のなかでいくつか描かれている(50)。

〈南パレスチナへの進軍の図〉

「テーベにいるモンチュウ神のようである *mi Mnṯw ḥr-ib Wꜣst*」[19]

「勇気，彼の力強さはヌゥトの息子のようである *ḳnt pḥty-f mi sꜣ-Nwt*」[20]

〈シャスとの戦いの図〉(51)

「外国のモンチュウ神 *Mnṯw ḥr-ib hꜣswt*」[21]

「強き心，バアル神のようである *cbꜣ-ib mi Bcrw*」[22]

〈ヒッタイトとの戦いの図〉(52)

「モンチュウ神のようである *mi Mnṯw*」[23]

「ヌゥトの息子のようにすばらしく力強き者 *wsr pḥty mi sꜣ-Nwt*」[24]

「セト神のように戦場を踏みしめる *hbi pri mi img Nbt*」[25]

「外国のバアルのようにすばらしく恐ろしい（者）*cꜣ ḥryt mi Bcr ḥr ḫꜣst*」

[26]
〈ヒッタイトの捕虜の獲得の図〉(53)
「テーベのモンチュウ神のようにすばらしく力強き者 *wsr pḥty mi Mnṯw ḥr-ib W3st*」[27]
〈アメン神の前で捕虜を牽きたてている図〉(54)
ここではエジプトとヒッタイトとがホルス神とセト神のような関係にあるものとして描かれている。エジプトがホルス神として描かれ，ヒッタイトがセト神として考えられているのである[28]。
セティ一世の頃に描かれたセト神はバアル神と同一視され，「力強さ」をあらわす神となっている。またモンチュウ神が描かれる場合は，エジプト国内の，主としてテーベでの「力の神」としてあり，バアル神として描かれる場合は，外国に対して「力強さ」を発揮する際に用いられている。ここから，セト神は戦場の中で，セト神の姿で敵を打ち倒す「力強き神」として描かれ，外国との関わりの中でバアル神として描かれ，エジプト国内で「力強さ」を表す時には，セト神ではなくモンチュウ神が描かれていることがわかる。くわえて，ホルス神とともに描かれる場合は，上エジプトを象徴する神であるとともに，エジプトと外国を対比させる際に，外国をあらわす神であった。
このセティ一世の次の王は，ラムセス二世である。その名からもわかるようにセト神ではなくラー神の名前をとっているが，これはセト神の名を嫌ったというわけではない。なぜなら，この名はラムセス二世の祖父であり，第19王朝の始祖であるラムセス一世からとったものと考えられ，ラムセス二世の治世下でもセト神に対する記述は多く存在しているからである。
ラムセス二世の頃にはヌベトのセト神殿が修復されており，有名なヒッタイトとの争いであるカデシュの戦いでは，セティ一世が行ったように，その軍隊の名前にセト神の名を使っている。他にもこのカデシュの戦いの中で，セト神やモンチュウ神が多く記述されている。
〈チャルゥでの前線への行進〉
「彼の父モンチュウ神のようである *mi it. f Mnṯw*」[29](55)
〈ラムセス二世の攻撃〉
「すばらしく力強き者，バアル神 *c3 pḥty Bcr*」[30](56)
またカデシュの戦いの公式な記録がアブシンベルとルクソールとラムセウムに残っているが，この中にもセト神は多く記述されている(57)。
〈ラムセス二世の単独の攻撃〉
「彼の時間の中でバアル神のようである *mi Bcr m wnwt·f*」[31]（ラムセウム，23行目）
「陛下は力強きセト神のようであった *iw ḥm. f mi Swtḫ pḥty*」[32]（ラムセウ

ム，24行目）

〈カデシュの戦いのレリーフ〉

「すばらしく力強きセト神のようであり，バアル神が彼自身である *mi Swty c3 pḥty Bcr m ḥcw·f*」[33]（ラムセウムの東の第一塔門）（ヒッタイトの王がラムセス二世に対して言った言葉）

このように，ヒッタイトの王が語る神はセト神でありバアル神である。またラムセス二世がヒッタイトと対立し戦う場面になると，ラムセス二世自身がセト神やバアル神と比較され，敵を打ち倒す「力強き」神として扱われている。

この他にもヒッタイトの王ハットゥシリとラムセス二世との間で交わされた条約がカルナックの南の外壁に残っている。その中でセト神はヒッタイトを象徴する神であり，また同時にエジプトでは知られていなかった，多くのヒッタイトの神々の決定詞としても使われた。この条約はヒッタイトとエジプトの両国で記述されている。ヒッタイトでの記述の中では，セト神は存在せず，彼らの神であるシャマシュとテシュブとして描かれ，エジプトの記述の中で，ラー神とセト神として描かれている[58]。

〈両国の今後の関係〉[59]

「ラー神とセト神が作り出した状況 *sẖr irw p3 Rc irw Swtẖ*」[34]（8行目）（ここではラー神がエジプトを象徴し，セト神がヒッタイトを象徴している）

〈エジプトとヒッタイトの神々の立会〉

「ケタ（=ヒッタイト）のセト神・・・パイルカの町のセト神・・・*Swtẖ n Ḫt3 …Swtẖ n dmi n P3yrk3 …*」[35]（27行目，この他にもセト神は9つの町の神として描かれている）

この条約の後，ヒッタイトからラムセス二世の下に王女が後宮に送られ，その時のマリッジ・ステラとよばれる石碑のなかで，セト神は天候を司る神としても現れている[60]。このことは「嵐」を表すヒエログリフが「セトの動物」を決定詞としてもっていることからもわかる[61]。この他にも，タニスで見つかったラムセス二世の石碑のなかで，セト神は「空の神」として述べられている[62]。

「セト神，すばらしく力強き者，空の主 *St c3 pḥty nb–pt*」[36]

また，下エジプトのタニスに建てられた「400年ステラ」とよばれる重要な石碑がある[63]。これはラムセス二世の頃に立てられた石碑と考えられており，セティという名の家臣によって作られたものである。彼はラムセス二世の父であるセティ一世を称えるためにタニスに派遣され，この中でヒクソスの支配者の治世からラムセス二世までの400年間のセト信仰について述べている。ここでは，実際に400年間下エジプトでセト信仰がなされたことを祝っているのではなく，ヒクソスの支配以前からセトの崇拝が行われていたことを明示し

ようとしているものと考えられている[64]。この中で，ラムセス二世はセト神にぶどう酒を捧げ，セト神は「力強き者」「ラーの舟の先頭に立つもの」として描かれている[65]。

以上のことを見ると，ラムセス二世がエジプトの行軍の最中にある時は，モンチュウ神が使われ，ヒッタイトやパレスチナとの戦いの場面では，セト神やバアル神が使われていることがわかる。またセト神は，時にはヒッタイトやその他の町を象徴する神であり，天候を司る神として描かれている。このことから，セト神はヒッタイトなどの外国と密接に関係し，特に，敵を打ち倒す「力強さ」を表す神として言及されているといえるであろう。

そして，ラムセス二世の次の王はメルエンプタハであるが，彼の治世においてもセト神の扱われ方は変わっていない。カルナックにあるアメン大神殿の壁上の碑文において，セト神は「力強さ」を与える神として描かれている[66]。この碑文は，メルエンプタハのシリアやリビアに対する軍事遠征に関するものであり，これもまたセト神の外国に対しての「力強さ」を表していると言えるであろう。

以上のことから，第19王朝ではセト神は「力強さ」の神として特に外国との関わりにおいて，それを打ち倒す「力強い」神であり，外国やエジプトの外にある町を象徴する神であった。またこの他にも空の神としても描かれている。この中では，「オシリスの殺害者」や「ホルスの敵対者」という捉え方は前面に出てきてはいない。しかし，オシリス神の聖地であるアビュドスではセト神の名前がモンチュウ神に置き換えられ，セティ一世の名前も通常描かれるような「セトの動物」では表されていない[67]ように，オシリス神話においてセト神が果たした「敵対者」という役割が忘れられていたというわけではないようである。

このようにセト神が外国に深く関わりをもつ神であったということや「敵対者」という役割がこの時代になっても変わらずに維持されていたということは，この後の時代にセト神が悪の要素をもつ神としてレリーフから消されていくことと深く関わっていると考えられる。

第3章　第19王朝以降のセト信仰

第19王朝以降，セト神の名を使った王は第20王朝の始祖セトナクトだけである。セトナクトの統治はわずか3年ほどであり，息子であるラムセス三世と共同統治をおこなっていたようである。セトナクトがいかにして王位についたのか，またいかなる人物であったのかはよくわかっていない。

セトナクトの次の王であるラムセス三世の時代を最期にして，エジプトの対

外関係は外国との混乱の時代に入っていくこととなる。ラムセス三世の頃は，地中海世界が激しく動揺した時代である。ミケーネ文明が滅亡し，土地を追われた難民がエジプトに押し寄せたり，人種が定かではない「海の民」の侵攻に晒されたりもしている。

このラムセス三世の頃に，ヌベトでウセルハトという神官によって石碑が作られている。その中では，セト神がアメン神とともに南北を表す植物の上に描かれ，セト神の修辞として「上エジプトの主 *nb t3 Šm3w*」，「ラー神の正統な子ども *inp nfr Rc*」[68] [37] というものが挙げられている。しかしこのような石碑があるとはいえ，第19王朝に比べるとセト神への言及はとても少なくなっている。またヌベトのセト神殿も北東に位置する馬草をおく小部屋の一部分が建て直されてはいるものの，それまでのような修復はなされていない。

第20王朝以降，セト神への崇拝は次第に興味が失われていったようである。ラムセス三世以降，ヌベトのセト神殿の修復は行われず，また新たな神殿も建てられていない。この他にも第19王朝のセティ一世の頃には，王はホルス神とセト神によって聖水をかけられ，祝福される図が使われたが，いまやセト神はその場面で描かれることはなく，代わりにトト神が現れるようになった。

またこの頃から，エジプトは西アジアでの権威を保つことが出来なくなっていたようである。第20王朝末のラムセス十一世の頃に書かれた「ウェンアメンの旅行記」では，西アジアはおろかレバノンでさえエジプトの影響力がなくなっていることがわかる。この旅行記では，セト神は空に雷を作る神としてのみ描かれており，外国の支配者として描かれてはいないのである[69]。

第三中間期にはいり第21王朝から第26王朝までの間，エジプトは混乱の時代であった。この時代はアッシリアやペルシアなど外部の勢力がエジプトに侵入し始め，外国との混乱状態に陥ることとなる。その混乱に乗じ，かつてはエジプトに服属し，侵略されていたリビアやヌビアの人々がエジプトを支配するようになる。

この中で，セト神の重要な記述がある。それは第22王朝のもので，ショシャンク一世の治世5年冬季第4の月第25日にダカラ・オアシスで行われたセトのお祭りの記録である。ダカラ・オアシスは，ルクソールの西300キロメートルのリビア砂漠に位置するオアシスであり，古王国時代の遺跡も残っていることから，非常に早い時期からエジプトの支配がリビア砂漠の方に及んでいたことを示している[70]。第22王朝は，ブバスティス朝とも呼ばれ，リビア人によって立てられた下エジプトを中心とした王朝である。このダカラ・ステラの中で，セト神は「力強き者」，「ヌゥトの息子」，そしてまたオアシスのセトと呼ばれている[71]。オアシスでセト神が崇拝された理由は，エジプト人の中

に，エジプトではない土地を司る神を，セト神とする考えがあったことに加えて，「ウェンアメンの旅行記」にもあるように，セト神が嵐の神であったことからきていると考えられる。砂漠の中にあるオアシスでは，水は欠かせないものであり，オアシスやそこに住む人々に水をもたらしてくれる嵐の神セトは，太陽神ラーやテーベのアメン神と同様に大きな崇拝を受けていたであろう。この中では，セト神は外国を打ち倒す神としての役割は与えられてはいない。またダカラ・オアシスだけではなくカルガ・オアシスでもセト神が現れている。カルガ・オアシスはエジプトの西の主要なオアシスのうち，最も南に位置し，かつ最も大きなオアシスである。ここには先王朝時代の居住の跡が残っているが，現存する遺構の多くはプトレマイオス朝時代やコプト時代のものであり，エジプトの歴史を通じて繁栄していたことが分かっている。この他にもエドフ神殿にあるテキストでは，王はホルス神にセト神の贈り物として，カルガ・オアシスのワインを収めている(72)。

この後の第25王朝に入りエジプトはヌビア人に支配されたが，ヌビア人の支配は緩やかなものであった。ヌビア人たちはエジプトへの進出を，侵略ではなく旧宗主国の秩序の回復とアメン神の権威の建て直しであると考えていたようである。新王国時代にエジプトがヌビアを属州としていた頃に，アメン信仰がヌビアに広まり，アメン神の神殿が建てられている。この王朝の後期になってアッシリアの勢力がエジプトにも広がっていくと，セト神はかつてのような敵を打ち倒す「力強き」神ではなく，「オシリスの殺害者」や「ホルスの敵対者」という要素にのみ重点がおかれ，セト自身が悪の化身となり，かつては太陽神ラーの舟の先頭に立ち，打ち倒していたアポピスと同一視されるようになった(73)。

この後，前670年にエジプトはアッシリアに支配され，アッシュールバニパルによってテーベも陥落した。アッシリアの支配は名ばかりのものであったようで，第26王朝はアッシリアの承認を後ろ盾として下エジプトのサイスを中心に勢力を広げている。またこの中で，一時的に政治が安定した頃になると，伝統的な宗教が復興した。美術様式も古王国時代や中王国時代へ回帰していたようである。アッシリアという外国の支配に晒されていたために，エジプト固有の，もしくはエジプトらしさというものに固執した結果であるとも考えることができる。セト神が外国と密接に関係する神であったことをふまえた上で伝統的な様式が復興した時に，セト神を新王国時代に見られたような「力強き」神として捉えることはなく，逆に「オシリスの殺害者」や「ホルスの敵対者」という要素が前面に出される形で現されたのは，オシリス神話が墓に刻まれるようになる古王国時代やオシリス信仰の民衆化の時代とよばれた中王国時代に回帰していたからと考えられる。

以上のように第20王朝だけを見ても，第19王朝期に比べるとセト神の記述は格段に減っており，その扱われ方も敵を打ち倒す「力強き」神や外国の支配者としての役割ではなく，空の主として雨や嵐をもたらす神としての役割に重点が置かれていることが分かる。その後，エジプトが外国人に支配されるようになり，かつてその外国を象徴する神であったセト神の記述は，悪の要素をもつものとして描かれるようになった。

第20王朝のラムセス五世の頃に書かれた「ホルスとセトの争い」(74)のなかでは，セト神は初めエジプトの主であり，力強き者として書かれているが，物語の中で嘘つきとして書かれたり，神々を脅したりするものとしても書かれている。そして神々にオシリスの後継者になることを否定され，ついには囚人の様に枷で縛り上げられて，セト神自らホルスをオシリスの後継者として認めさせられているのである。

このように第三中間期から末期王朝時代にかけて，セト神は新王国時代にあったような扱いはなされていない。それどころかそれまでになされなかった排除がなされていくようになる。新王国時代であれば，セト神の名前が置き換えられるのは，オシリスの聖地アビュドスのみであった。しかし，この時代になると第一中間期から立て直され，維持されつづけたヌベトのセト神殿も放置されるようになり，それまでは自らの役目であったラー神の舟の先頭にたって混乱の蛇アポピスを倒すという役割をトト神に取って代わられ，アポピスともどもセト神も追い払われ，倒されることとなったのである。

第19王朝以降を見てみると，第2章に挙げたようなセト神の好戦的な，敵を打ち倒すような記述はなされず，逆に打ち倒される記述がなされるようになっている。このことは，第19王朝以降のエジプトの状態と比較できると考えられる。第三中間期にはいると，かつて遠征を繰り返しアジアに勢力を誇っていた時代から，それまで支配下においていた国々から侵略される時代へと移り変わった。外国の文化を強制され，それまでの文化を排除されるほどに支配されたというわけではない。しかしそれでも，異国の侵略を受け支配されているという環境は，エジプト人にとってはヒクソス以来のことである。そのヒクソスを追い出し，外国へと広がっていった新王国時代の中では，外国との関わりを持つようになっていたセト神は，外国という敵と戦い，自らの領土とする時には，「力強さ」をもって敵を打ち倒すことが出来た。しかし，打ち倒すべき敵が逆に侵略してくるとその「力強さ」は，外国と関わりをもっていたために，否定されなければならないものとなった。いまや「力強さ」を持っているのは外国の侵略者たちであるからである。

また外国との観点から捉えてみると，この時代に入ってもセト神がオアシスで崇拝されていたということも説明することが可能となるであろう。先に書い

たように，外国と関わりをもっていたために，エジプト国内で排除されていったセト神も外国との関わりのない，あるいは外国との軋轢のないオアシスでは，セト神は空の主としてオアシスに嵐をもたらし，雨をもって旅人をうるおす神として崇拝されていたとも考えられる。なぜなら，オアシスはキャラバンルートの拠点であり，貿易をするうえで，外国というものは排除すべき敵ではなく，貿易の相手として付き合っていくべき国であり，人々であったからである。確かに，オアシスも外国の侵略に晒されていたかもしれない。その拠点をおさえることは，キャラバンルートを支配することと結びついているからである。しかしどの国に属するものであっても，貿易がなされる以上，交流を持つことが必要であり，決して排除するものではないのである。それゆえにオアシスや砂漠にいる間は，セト神は敵を打ち倒す神でも打ち倒されるべき悪の要素をもつ神でもなく，雨をもたらす神として崇拝されたのである。

お わ り に

これまでセト神は，悪の神としてイメージされることが多かった。しかしセト神の信仰はエジプトの歴史が始まる以前から存在し，王朝時代に入っても依然としてその信仰は継続されている。長いセト神の信仰の中で，悪の要素が前面に押し出されたのはエジプトの歴史の中でも末期の頃といえる。確かにオシリス神話がピラミッド・テキストの中で書かれた古王国時代には，セト神は「オシリスの殺害者」や「ホルスの敵対者」としてあった。しかし，同時に上エジプトを象徴する神として，また下エジプトのヘリオポリスの主要な神々である九柱神の一員である。

第一中間期にはいり，セト神の信仰中心地であるヌベトにセト神殿が建設されはじめ，中王国時代に入ると，図像の中においてもセト神は上エジプトを象徴する神として描かれるようになる。

第二中間期に入ると，西アジアの天候の神バアルがセト神と結びつくようになり，ヒクソスが下エジプトに都であるアヴァリスを作り，そこを拠点としていたために，結果としてアヴァリスを中心としたセト神の信仰が下エジプトでも広まっていった。この異国の神であるバアルと結びついたことで，セト神は上エジプトを象徴する神から外国を象徴する神としても描かれるようになる。

新王国時代はまさに国内の政治に専念するだけでなく，外国へと侵略していく時代であり，オシリス神話にあるようなセト神の，神をも打ち倒す「力強さ」というものが求められる時代であったといえる。第二中間期に異国の神バアルと結びつき，外国を象徴する神となっていたセト神は，同じく「力強さ」を表すモンチュウ神よりも外国との戦いの場面でより求められていたというこ

とは十分考え得ることである。

アマルナ革命の混乱の後，アイ王，ホルエムヘブ王を経て，外国へ侵略をし，国力を増やそうとしていた第19王朝にはいり，外国を支配する神であり，敵を打ち倒す「力強き」神であるセト神は，これまで以上に重要さを増したということが出来るであろう。第19王朝の出身地が，推察ではあるが，下エジプトのセト神の信仰中心地であるアヴァリスであったことをふまえた上で，ラムセス一世が息子に「力強さ」を発揮するために，第11王朝のモンチュウヘテプのようにモンチュウ神の名を付けるのではなくセト神の名を用いたということは，この時代が外国へ拡大しようとしていたことと関係しているであろう。単に祖父の名を貰っただけかもしれないが，セティ一世だけではなく，ラムセス二世もセト神を父と呼び，外国の支配者として，また敵を打ち倒す「力強き」神として扱ったことは事実である。外国へ拡大しようとしていたこの時代には，セト神の「オシリスの殺害者」という悪の要素は単にオシリス神の聖地であるアビュドスに限定される。

つまりセト神が王名として使われた背景には，この時代の外国への拡大という政策があり，セト神はこの外国に対する力の神として，ラー神やアメン神よりも戦場において，より具体的に力を発揮することが出来たであろう。また，外国とのかかわりという視点から見ると，拡大しようとしていた新王国時代においてセト神は大いに崇拝し得る神であった。その後，外国からの侵略をうけるようになった第三中間期や末期王朝時代になると，セト神は追放すべき悪の要素をもつ神となったのである。もっとも，セト神の嵐の神という要素は，オアシスに住む人々にとっては重要なものであり，第19王朝や第20王朝初期に比べると，微々たるものではあるが，セト神の崇拝はオアシスの中では維持されつづけた。

第19王朝以前においては，上エジプトや外国を象徴し，力強さを表すものであり，第19王朝においては，外国へ拡大する政策に対応して，その象徴するものを十分に発揮させた。この時代においては，それまでに表されたような否定的な役割を知っていてもなお，王名としてつけるに値するものであった。その後排除され始めた時代においても，その役割を限定しつつ崇拝されつづけた。このように，セト神はそれぞれの時代の流れに応じて，その役割を変化させ，描かれてきたのである。

注

(1) H. te Velde, *Seth, God of confusion* (Leiden, 1977), p. 2.

(2) W. M. F. Petrie, *Tanis* I (London, 1885), p. 9, pl. 3.

(3) H. te Velde, *op. cit*., p. 2.

(4) *Ibid*., p. 9.
(5) *Ibid*., p. 7.
(6) W. M. F. Petrie and J. E. Quibell, *Naqada and Ballas* (London, 1896), p. 42, pl. 43.
(7) W. M. F. Petrie, *op. cit*., p. 68, pl. 68.
(8) P. E. Newberry, '*The pig and the cult-animal of Set*', *JEA 14* (1928), 211.
(9) H. te Velde, *op. cit*., p. 13.
(10) *Ibid*., p. 10, p. 13 ; P. E. Newberry, *op. cit*., 211.
(11) 大島一穂,「ホルス神とセト神の争いの神話と『二つの国の統一』」,『史泉』第 56 号 (1981 年), 53 頁。
(12) プルタルコス, 柳沢重剛訳『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』(岩波書店, 1996 年)。
(13) 大島一穂, 前掲。
(14) 岡山光憲,「古代エジプトにおけるセト神とその信仰について」『武蔵大学人文学会雑誌』, 第 19 巻第 2 号 (1988 年)。
(15) W. M. F. Petrie and J. E. Quibell, *op cit*.(London, 1896).
(16) H. te Velde, *op. cit*., p. 8.
(17) W. M. F. Petrie, *The Royal Tombs of the Earliest Dynasties* (London,1901), p. 53, pl. 21, pl. 22.
(18) H. te Velde, *op. cit*., p. 114 ; W. M. F. Petrie, *op. cit*., pl. 22, plan 179.
(19) W. M. F. Petrie, *op. cit*., p. 53, pl. 23.
(20) *Ibid*., p. 53, pl. 22, plan 179.
(21) Kathryn A. Bard, *Encyclopedia of the archaeology of ancient Egypt* (London 1999).
(22) 杉勇,『古代オリエント集』筑摩世界文學大系 1 (筑摩書房, 1983 年), 582 頁。
(23) 杉勇, 前掲, 582 頁。
(24) 同書, 583 頁, 589 頁。
(25) 同書, 586 頁。
(26) 同書, 481 頁。
(27) H. te Velde, *op. cit*., p. 114 ; W. M. F. Petrie, *op. cit*., pl. 22, plan 179.
(28) W. M. F. Petrie, *Naqada and Ballas*, p. 66, pl. 85.
(29) *Ibid*., p 66, pl, 85.
(30) E. オットー, 吉成薫訳『エジプト文化入門』(弥呂久, 1993 年), 156 頁。岡山光憲, 前掲, 10 頁。
(31) 杉勇, 前掲, 467 頁。
(32) A. H. Gardiner, '*New renderings of Egyptian texts*', *JEA* 5 (1918).
(33) 岩崎康司,「古代エジプト・ヒクソス時代のアヴァリスとシャルヘン」『史泉』第 93 号 (2001 年)。
(34) 近藤二郎,『エジプトの考古学』世界の考古学 4 (同成社, 1997 年), 118 頁。
(35) 杉勇, 前掲, 479 頁。
(36) 近藤二郎, 前掲, 119 頁。

(37) W. M. F. Petrie, *Tanis*, Ⅰ, p. 8, pl. 3, plan 19 A.

(38) H. te Velde, *op. cit*., p. 116.

(39) *Ibid*., p. 121.

(40) W. M. F. Petrie, *Naqada and Ballas*, p. 66, pl. 85.

(41) *Ibid*., p. 68, pl. 78.

(42) *Ibid*., p. 67, pl. 77.

(43) セト神が「セトの動物」だけで表されている場合は，セト *St* とよぶものとする。

(44) W. M. F. Petrie, *op. cit*., p. 68, pl. 79.

(45) W. M. F. Petrie, *Roman Portraits and Memphis*, Ⅳ (London, 1911), pl. 28.

(46) H. te Velde, *op. cit*., p. 129.

(47) *Ibid*., p. 132.

(48) C. R. Lepsius, *Denkmäler aus Aegypten und Aethiopien Abtheilung*, Ⅵ (Berlin, 1879), 124 b (以下 LD とする).

(49) LD, Ⅵ, 124 b.

(50) *Ibid*, 126 b.

(51) *Ibid*, 127 a.

(52) *Ibid*, 130 a.

(53) *Ibid*, 130 b.

(54) *Ibid*, 129.

(55) A. Mariette-Bey, *Karnek* (Paris, 1875), pl. 48.

(56) *Ibid*., pl. 49.

(57) LD, Ⅵ, 153.

(58) S. Langdon and A. Gardiner, '*The treaty of alliance between Hattušili, king of the Hittites, and the pharaoh Ramesses II of Egypt*', *JEA* 6 (1920), 179.

(59) *Ibid*, 146.

(60) Ch. Kuentz. '*La "stèle du mariage" de Ramses II*', *ASAE* 25 (Caire, 1925). P 232–234.

(61) A. Gardiner, *EgyptianGrammar*, 3rd ed. (Oxford, 1957), p 460.

(62) J. Yoyotte, '*Les stèles de Ramsès II a Tanis*', *KÊMI* Ⅺ (1950), pl. 7, stela 5, face c.

(63) M. P. Montet, '*La stèle de L'an 400 retrouvée*', *KÊMI* Ⅲ (1930–1935).

(64) H. te Velde, *op. cit*., p. 126.

(65) M. P. Montet, *op. cit*., pl. 15.

(66) LD, Ⅵ, 199 a.

(67) Rosalie David, *A guide to religious ritual at Abydos* (London, 1981), p. 49.

(68) W. M. F. Petrie, *Naqada and Ballas* (London, 1896), p. 70, pl. 77.

(69) 杉勇，前掲，467 頁。

(70) A. Gardiner, '*The Dakhleh Stela*', *JEA* 19 (1933), 19.

(71) H. te Velde, *op. cit*., p. 115.

(72) *Ibid*., p 115.

(73) J. チェルニー，吉成薫・美登里訳『エジプトの神々』(弥呂久，1993年)，172頁。

(74) 杉勇，前掲，468頁。

付記

本論は，平成14年度の卒業論文に加筆修正をしたものである。

(関西大学文学部史学・地理学科卒業 [redacted])

象形文字　一覧

[1] [2] [3]

[4] [5] [6] [7]

[8] [9]

[10]

[11] [12]

[13] [14] [15]

[16] [17]

[18] [19]

[20] [21]

[22] [23]

[24] [25]

[26]

[27] [28]

[29] [30]

[31] [32]

[33]

[34]

[35]

[36] [37]